

8-7					
主題	褥瘡、スキンケア、内出血減少へ向け職員意欲向上に取り組んだ具体的手法				
副題	介護方法の標準化を目指して				
キーワード 1	標準化	キーワード 2	意欲向上	研究(実践)期間	12ヶ月

法人名・事業所名	社福) 多摩済生医療団 多摩済生園・多摩済生ケアセンター
発表者(職種)	広井翼(介護職員)、富田亜未(理学療法士)
共同研究(実践)者	金井美佐子(看護職員)、角田京子(管理栄養士)、土屋香織(介護職員)、他

電話	042-343-2291	FAX	042-342-2900
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	当施設は昭和 52 年に東京都小平市の緑豊かな敷地内に開設され、現在、利用定員多床室棟 94 名・ユニット棟 60 名・ショートステイ 9 床、同敷地内に多摩済生病院、デイサービス、訪問介護、訪問看護、居宅介護、地域包括支援センター、定期巡回随時対応型訪問介護看護等を併設しています。理念＝添う心
-------	--

### 《1. 研究(実践)前の状況と課題》

施設内で褥瘡防止の勉強会などを定期的で開催することで、褥瘡を予防する為のケアの実践は定着して来たが、介護技術の標準化が図れていないことが原因と思われる小さな内出血やスキンケア(皮膚裂傷)が発生してしまうことが次の課題としてあがった。

### 《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

目的は「原点に帰ること」。日々のケアの質を向上させるために、介護の基本に目を向ける。  
スキンケアの理解、ケアの標準化、チーム意識の向上、多職種連携

- スキンケアの予防方法の理解  
利用者への褥瘡予防の他、誤拘縮予防、不快感の軽減にも繋げる事が出来るのではないか。  
また、それに対しての職員意識も高まるのではないか。
- 介護技術の標準化  
介護方法の標準化を図ることで「スキンケア(皮膚裂傷)の発生」「内出血の発生」を防止することが出来るのではないか。  
利用者の QOL(生活の質)を維持し快適に生活出来るのではないか。  
また、標準化を目指す過程で、チーム意識、多職種協働がより一層推進するのではないか。
- 褥瘡予防の推進

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

- 職員全体会でのスキンケア予防、褥瘡、背抜きについての勉強会開催
- 背抜き強化月間を設け、背抜きチェック表の作成

- 動画マニュアル作成

  - 背抜き（スライディンググローブを使用した背抜き方法）

  - 介助補助具使用方法（トランスファーボードを用いた移乗介助）

  - 移乗介護の標準化から個別移乗介助方法（注意するポイント、介助方法の可視化）

- 体圧計測機付エアーマットの活用（褥瘡好発部位の確認や適切な除圧方法の可視化）

- 褥瘡利用者への対応策について患部やポジショニング等の写真データをタブレットで共有しながらのモニタリングを看護職員、理学療法士、栄養士、介護職員等で実施（週1回以上）

#### 《4. 取り組みの結果》

- 勉強会を行う事によりスキんテア予防、褥瘡、背抜きについて理解できた。

- 背抜き強化月間を設けた事で背抜きの理解を得られ、背抜きを行う職員が増えた。

  - （背抜きの勉強会半年後のアンケート結果 背抜きの必要性・行い方を理解している

  - 64人/64人中、特定の利用者また全員に背抜きを実施している62人/64人中）

- 動画マニュアルを作成することで、いつでも見返すことができるようになり実践しやすくなった。新人職員にも伝えやすくなった。

- 体圧計測機付エアーマットを使用することで局所圧等利用者の状態が把握しやすくなり、ポジショニング・背抜きへの意欲の向上・職員の技術向上へ繋げることができた。

- 褥瘡利用者に対するカンファレンスを他職種と毎週行う事で各職種から様々な意見が出て、褥瘡の早期治癒・知識の向上へ繋がった。

#### 《5. 考察、まとめ》

褥瘡・スキんテア・内出血等を減少させる事について具体的数値で表す事は難しかった。しかし、少しでも減らす為の第一歩として職員の意識はアンケート結果からも高まっていることがわかり、背抜き等も実際に取り組んでいる様子がみられるようになった。

本取り組みを継続していれば、実際に減少出来るものと考えている。

今後の課題とし、更に深化・継続を図りたい。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

#### 《7. 参考文献》

ベストプラクティス スキンテア（皮膚裂傷）の予防と管理

（2015年10月25日発行 発行者 眞田 弘美）

#### 《8. 提案と発信》

様々な動画の作成や全体会議での研修を行うなど介護技術の向上を目指してやってきた。特に難しい移乗動作は、福祉用具を使用するなど現在も思考錯誤しながらケアのスキルアップを目指している。今後も様々な目線で他職種間で意見を出し合いながら、ケアの標準化が図れるよう取り組んでいく。